

○趙 穎** 岸本 幸臣* 宮崎 陽子**

(*大阪教育大学 **大阪教育大学・院)

【研究目的】前報に同じ

【研究方法】前報に同じ

【考察結果】(住宅・起居・生活の満足度) 住まいの全体評価では満足率が 50.8%と高く、特に日照・通風の評価が一番高い。部屋数の評価はゆとり度と相関している。起居様式の評価では、公室空間の満足度が相対的に高い。起居様式別の起居満足度では、椅子座系の食事室起居評価が高く、椅子式の定着が見られる。家族生活全体の満足率も 58.8%と高い。ただ、個人生活の尊重に対する不満足率が 1/4 に近くなっている。家族相互理解や団らん時間を重視する人が団らんと一体感の評価が高い。更に家族相互の一体感に対する満足度と親子間会話の満足度とは密接な相関が認められ、その意味では、会話を促進する平面計画工夫が求められる。また、家族団らんの満足度と一体感の満足度にも密接な相関が認められる。(住まいと生活評価の関わり) 自室の起居様式と個人尊重の満足度とは密接に関わっている。団らん空間としての居間の起居様式と家族団らんの満足度にも密接な関連が認められる。起居志向と住まい及び生活評価の関わりには、床座起居志向の人達が、住まいの全体的な総合評価や団らん評価についての満足度が高く見られる。(生活観と LDK) 生活時間の考え方や住み方の LDK には、かなりの相関が見られ、団らん重視の考えの人達には「LDK」型住み方が多い。LDK 志向には団らん重視の人達が「L+DK」型志向が高く、L 分離を重視している。(起居志向と LDK) 床座志向層は「LDK」タイプの住み方を、また椅子座志向は「L+DK」の住み方を選択するものが多い。